

【現代語訳】

花のような清姫が居る他は、松ばかりの所・・・。
花の清姫は想い人を待つばかりだが、やがて陽が暮れて、空は赤く染まり、鐘の音が響いて来る。

鐘には恨みが数々あるのです。夕刻から夜半にかけて撞く鐘の音は「誘行無常」(万物は変わり変わる)を感じ、夜半から明け方に撞く鐘の音は、見生滅法(生あるものは、いずれ滅びて死ぬ)と感じます。

夜明けの鐘は、「生滅滅已」(生ある世界から涅槃の世界に至ること)を感じ、日没の鐘は「寂滅為楽」(煩惱を捨て去り安らかな悟りの境地になる)を感じるものです。

そんな煩惱多き私の人生を聞いて、驚く人も居ません。
女には五障(さまざま)があつて、どんなに仏道修行をしても、梵天王、帝釈天、魔王、韃靼聖王、仏陀の五つには成れないと云うらしいけれど、そんな悟れぬ心の裏を晴らして、私も迷いを去った真実の心で月を眺めてみたいものです。

誰にも言えないことだけに、乱れた髪のままに私は激しく抱かれました。でも、あの人がつれないのは、ただ移り気なだけで、

本当に男というのには性悪なものです。

廊では「桜ちゃん」とか言つて、可愛い〜とおだてられても、女の袂は二つあるのよ。一方で客相手のお勤めをしていても、もう一方で、思っているのは主だけ。

ここは室小野町遊廓は女郎の早咲きというところかな。
「禿立ち」という見習い期間から、室に置いて花が早く咲くよう軽いのよね。

江戸では、色恋にまつわる廓の掟があつて、武士も袴を立てて入らず、顔を深編み笠に隠して来るわ。見栄っ張りと思意地が光り物なのが吉原なのです。

花の都の京都では睡言を和歌で心を通わすらしい。
和歌の道は「敷島の道」と言うけど、「敷島原」なんちゃって、京都の島原遊廓に通う色恋の道だよな。そこでお勤めをする女郎

は誰と寝るのかつて？ そりゃあ「伏身」になるのだから、伏見黒染町の、法衣が黒染の坊主つてどこかな。
大坂に、煩惱菩提の撞木町ありとは、遊廓の煩惱を鐘の菩提で

断ち切る、まるで撞木(鐘を突く棒)の両端というわけね。

更に、難波の四筋遊廓に通い、奈良は木辻遊廓まで来た。
播磨国の龍野という所では、辻に「禿」が立つというから、

この室小野町遊廓は女郎の早咲きというところかな。
「禿立ち」という見習い期間から、室に置いて花が早く咲くよう軽いのよね。

江戸では、色恋にまつわる廓の掟があつて、武士も袴を立てて入らず、顔を深編み笠に隠して来るわ。見栄っ張りと思意地が光り物なのが吉原なのです。

花の都の京都では睡言を和歌で心を通わすらしい。
和歌の道は「敷島の道」と言うけど、「敷島原」なんちゃって、京都の島原遊廓に通う色恋の道だよな。そこでお勤めをする女郎

は誰と寝るのかつて？ そりゃあ「伏身」になるのだから、伏見黒染町の、法衣が黒染の坊主つてどこかな。
大坂に、煩惱菩提の撞木町ありとは、遊廓の煩惱を鐘の菩提で

西も東も南に見に北(来た)、人気舞台の富士町の花の顔を。そうでしょよ。

見れば恋心が増すよ、そうでしょよ。可愛らしい花娘の姿だもんね。播磨国の龍野という所では、辻に「禿」が立つというから、

この室小野町遊廓は女郎の早咲きというところかな。
「禿立ち」という見習い期間から、室に置いて花が早く咲くよう軽いのよね。

江戸では、色恋にまつわる廓の掟があつて、武士も袴を立てて入らず、顔を深編み笠に隠して来るわ。見栄っ張りと思意地が光り物なのが吉原なのです。

花の都の京都では睡言を和歌で心を通わすらしい。
和歌の道は「敷島の道」と言うけど、「敷島原」なんちゃって、京都の島原遊廓に通う色恋の道だよな。そこでお勤めをする女郎

は誰と寝るのかつて？ そりゃあ「伏身」になるのだから、伏見黒染町の、法衣が黒染の坊主つてどこかな。
大坂に、煩惱菩提の撞木町ありとは、遊廓の煩惱を鐘の菩提で

美しい景色は、三国(日本、唐、天竺の三国)と言われる「富士山」の四季の眺めです。

雪のように見えるのは、「吉野山」の桜花吹雪。
花の吹雪が嵐のように散り来る、散り来る、京都の「嵐山」。

京の宇治橋東は「朝日山」の山並みを見渡せて、「歌の中山」と呼ばれる、景勝な清閑寺の小径が続き、その東は近江八景の「石山」です。

おお嬢し、おお嬢し。
ゆくゆくは夫婦になるのよね。年季が明ける迄は、廓で他の男と夜のお勤めをしても仕方がないと、何も言わないうね。

あの時に交わした夫婦約束の誓いの書き付けは偽りだったの？
嘘か誠かと、どうしても確かめたくて、私、迷いに來ました。

湯女のお藤さんと一夜の契りを結ぶ温泉は、「有馬山」でしょう。
否かどうか、粋な兄さんの口説き言葉を、旧都の大和三山の

「明日香」で、返事を今日か明日かと、
中山道から「木曾山」を臨む妻籠宿で妻恋し、

吉原のある浅草の「待乳山」で待つということね。
我が身を、藤原太が百足を退治した近江富士と呼ばれる「三上山」に折りに来たという山は、三社の「稻荷山」よ。

皆、出会う人は好きすぎだけれど、男山と女山とが向き合う吉野川を挟む「林青山」で縁を結んだら、二人の仲には「黄金山(子がね)」が出来たのね。

花咲く栄枯の我が国には、
神建御名方命という神様がおられて、この國を護つておられます。その神様は木花咲耶姫に助力して、咲耶姫の「叔母」に穢れを「捨」させて、天の「月の宮」に叔母を上げられたのです。

その伝説のある「焼捨山(捨捨山)」こそが「田毎の月」で有名な長野更科郡の「冠着山」のことです。

さて、山科と大津の境にある「音羽山」では峯から松風(待つ風)が吹き、その北の「逢坂山」では恋しい人が待っています。

「思えば、此の鐘は恨めしいことよ」
と云つて、鐘を吊す電頭に手を掛けて、飛び乗ろうとでもするの

かと思えば、何と、そのまま鐘を引つ担いでどこかに消えてしまつた。
早月の頃、五月雨が降ったら、村の若い娘達は田植唄を歌うよ。

最初の日期でも、もう迷つてしまつたよ。
懺悔、懺悔。六根の罪障を懺悔せよ。

不動明王様、不動明王様。
オイ、祈つたか、
ええい、何でもせい。ええい、何でもせいよ。

能仕立てのこの段は省略されることが多い
そうこうしている内に日が落ち、
そうこうしている内に、寺々の鐘が鳴つて夜も更けてゆく。

月は西に傾き夜鳥が鳴いて、降霜、降雪の気配が天に満ち、
まもなく満ち潮だろうか。

この山寺から見える漁村の漁り火を惹くに感じながら、
人々は眠りに落ちた。

その隙を突いたかのように、娘の姿をした怨霊が寺の鐘に狙い寄つて来て、撞こうとするのか・・・。
「思えば、此の鐘は恨めしいことよ」

と云つて、鐘を吊す電頭に手を掛けて、飛び乗ろうとでもするの
かと思えば、何と、そのまま鐘を引つ担いでどこかに消えてしまつた。

早月の頃、五月雨が降ったら、村の若い娘達は田植唄を歌うよ。
最初の日期でも、もう迷つてしまつたよ。

懺悔、懺悔。六根の罪障を懺悔せよ。
不動明王様、不動明王様。
オイ、祈つたか、
ええい、何でもせい。ええい、何でもせいよ。

乱れ髪の美しい女が現れて、
思えば、思えば、恨めしいことよ、と云つて、
鐘の電頭に手を掛けて飛び上がるのかと思つたら、何と鐘を引つ担いで、どこかに消え失せてしまつた。

誰に聞かせるのか、舞っているのか、詠経の声か？
エエ、何でもしてくれ、訳はワカラんが、何でもしてくれ。

春は花見で囲い暮を巡らして、一杯やるのが風流で良い、
夏は青簾を掛けた屋形船で、一杯やるのが風流で良い、
ヨイヨイ、ヨイヨイヨイ、
ありやありや、こりやありや、よいとな。

秋は武蔵国の月を愛でて、一杯やるのが風流で良い、
冬は東屋で雪見をしながら、一杯やるのが風流で良い、
ヨイヨイ、ヨイヨイヨイ

ありやありや、こりやありや、よいとな。
遊女の世界でも初咲は、それらしくして、口紅を差しても品良く、
形良くして、ああ、優しそうな女だなとか、可愛いとか言わせる

でしょ。それは、そうですよ。それは、そうですよ。
不飲酒戒を破つて浮きに浮かかれては、死後、四十九日で赴く霊界の
最初の七日期で、もう迷つてしまつたよ。

懺悔、懺悔。六根の罪障を懺悔せよ。
不動明王様、不動明王様。
オイ、祈つたか、
ええい、何でもせい。ええい、何でもせいよ。

お、鐘は動くのか、動かんのか？
ナメグサ・パンダラ・バサラング
こりや、動かんぞ。

と、真言密教の秘密の経文を異様な鐘をめぐけて、
唱えては責め掛け、唱えては責め掛け、
エエ、何でもしてくれ、訳はワカラんが、何でもしてくれ。

春は花見で囲い暮を巡らして、一杯やるのが風流で良い、
夏は青簾を掛けた屋形船で、一杯やるのが風流で良い、
ヨイヨイ、ヨイヨイヨイ、
ありやありや、こりやありや、よいとな。

秋は武蔵国の月を愛でて、一杯やるのが風流で良い、
冬は東屋で雪見をしながら、一杯やるのが風流で良い、
ヨイヨイ、ヨイヨイヨイ

ありやありや、こりやありや、よいとな。
遊女の世界でも初咲は、それらしくして、口紅を差しても品良く、
形良くして、ああ、優しそうな女だなとか、可愛いとか言わせる

でしょ。それは、そうですよ。それは、そうですよ。
不飲酒戒を破つて浮きに浮かかれては、死後、四十九日で赴く霊界の
最初の七日期で、もう迷つてしまつたよ。

懺悔、懺悔。六根の罪障を懺悔せよ。
不動明王様、不動明王様。
オイ、祈つたか、
ええい、何でもせい。ええい、何でもせいよ。

東方の清浄なる青龍に請願す。西方の白鱗なる白龍に請願す。
廣大無辺の宇宙の数限りない龍王よ、我らを哀れみ慈しみて、
どうか我らの願いをお聞き入れ下さい。

僧達は、
蛇体よ、おまえは哀れみを持って、自らを護む、丁度その時ですよ。
さすればどこにも恨み心など、有らうはずがありませんと祈り、
祈られた方は飛び上がり、
仏法の詠経の聲に悟らされ、金色の花を降らしたその姿は、
なんと不思議で美しい出来事なのでしょうか。

今和五年八月二十一日
大中正比呂 拙訳



京鹿子娘道成寺 長明正本表紙
【長明原本集成】 卷二
(1937年、長明原本集成刊行会)